日本緩和医療学会ニューズレター

Vol.108

Aug.2025

特定非営利活動法人
日本緩和医療学会
Japanese Society for Palliative Medicine

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8 日栄ビル603B号室
E-mail:info@jspm.ne.jp　URL:https://www.jspm.ne.jp/

主な内容

巻頭言 23

Journal Club
Journal Watch を振り返って 24

よもやま話 32

委員会活動報告 35

巻頭言

令和８年診療報酬改定へ向けた取り組み

国立がん研究センター中央病院　緩和医療科
石木　寛人

健康保険・介護保険委員長の石木寛人です。

日本緩和医療学会では診療報酬に関連する業務を当委員会が担当しています。2年毎に実施される診療報酬改定では診療報酬が見直され、既存の点数の修正や、診療報酬の新設が実施されます。診療報酬の変更は医療機関の収益に直結し、日常臨床に大きな影響を与えます。私たちはできるだけ多くの会員の皆様の「こうだったらいいのにな」を集約して学会の要望として提案し、診療報酬に反映したいと考えています。当学会の特長は「多様性」です。緩和ケアは多職種チーム医療を基本とし、会員も医師、看護師、薬剤師、心理療法士、栄養士、歯科医師、歯科衛生士、リハビリセラピスト、MSW 等多くの職種で構成されます。背景となる診療科も多彩ですし、診療フィールドも病院 / 緩和ケアチーム、緩和ケア病棟、在宅と多様です。このような様々な経験、考え方を集約し、皆様が働きやすい体制づくりに取り組むのが当委員会の役割です。

現在、R8 年診療報酬改定へ向け、内保連、看保連へ医療技術評価提案書を提出したところでございます。医療技術評価提案書の提出に当たり、学会員を対象としたアンケート調査を昨年実施し、結果を取りまとめました。皆様からは現行の制度の修正、ブラッシュアップ、新規提案など多くのご意見をいただき、心より感謝申し上げます。

前回の R6 年改定に当たり、非がんの緩和ケアとして、心不全や呼吸不全に対する緩和ケアの適応拡大をそれぞれ日本循環器学会、日本心不全学会および日本呼吸器学会、日本呼吸ケア・リハビリテーション学会と共同提案を行いました。残念ながら採択されませんでしたが、この共同提案を進める中で、他領域の先生方から「緩和ケアは大事だよね」「緩和ケアは必要だよね」と何度もお声がけいただき、世の中の緩和ケアに対するニーズと期待を強く実感しました。我が国の緩和ケアはがん対策基本法とがん対策推進基本計画に則り、がん緩和を中心に発展してきました。しかし緩和ケアは「生命を脅かす病に関連する問題に直面している患者とその家族」が対象です。「生命を脅かす病」はがんの他にもたくさんあり、国際的には非がん疾患に緩和ケアを提供できる国が大半です。緩和ケアはおそらく私たちが思っている以上に多くの人たちから期待されています。高齢化が進む我が国で今後も非がん疾患や救急医療など緩和医療が求められる場面はますます増えていくと予想されます。多くの方に緩和ケアを届けたいという願いは誰もがうなずくところかと思いますが、これを制度化するためには多くの方のご意見を伺い、足並みをそろえて進めていくことが大切です。今後も皆様のご支援とご指導をお願い申し上げます。

Journal Club Journal Watch を振り返って

当会ニューズレターで長年にわたり連載してまいりました
「Journal Club」および「Journal Watch」は、AI をはじめとする情報技術の進展などを踏まえ
第 107 号をもって一旦の区切りを迎えることとなりました。

今号では、長きにわたって連載を支えてくださった先生方からの振り返りの言葉をご紹介いたします。
これまでご愛読いただいた皆さまに心より御礼申し上げます。

◆ ◆ ◆

Journal Club を振り返って

名古屋大学大学院　医学系研究科　総合保健学専攻
佐藤　一樹

ニューズレターの内容が一新されることになり、これまでの功労者（？）ということで、原稿執筆の機会をいただきました。Journal Club について自由に書いてよいとのことです。徒然なる昔話にさほどの需要はないと存じますが、お目汚し失礼いたします。

大学院に進学し、“研究”というものに初めて触れた頃、知識を吸収したいという欲求が非常に高く、季節ごとに届けられるニューズレターを私は楽しみにしていました。スマートフォンのない時代でしたので、研究室でお昼ご飯を食べながら隅から隅まで読んでいた記憶があります。

指導教員の河正子先生が編集委員を務めておられたご縁で、Journal Club にときどき寄稿させていただくようになりました。最初の原稿はニューズレター 32 号（2006 年 8 月）に掲載された「EORTC QLQ-C15-PAL の開発：緩和ケアを受けるがん患者用の短縮版 QOL 尺度」です。その後も断続的に寄稿を続け、104 号（2024 年 8 月）までに計 47 本のレターを掲載していただきました。これほど多くのレターを執筆する機会をいただけたのは、私自身が長らく執筆者の取りまとめを担当していたからです。原稿をご寄稿くださった多くの方々に心より感謝申し上げます。

また、Journal Watch も 58 号（2013 年 2 月）から 91 号（2021 年 8 月）まで、足かけ 8 年間担当いたしました。好みの論文を選ぶ Journal Club に対し、雑誌を丸ごとレビューする Journal Watch は作業感が強く、「緩和ケアに携わるどこかの誰かにきっと役立っているはず」との使命感を糧に地道に続けてまいりました。バトンを受け取ってくださった川島有沙先生にあらためて感謝申し上げます。

最後に、個人的なヒット記事をご紹介させていただきます。

32号：EORTC QLQ-C15-PALの開発
44号：緩和ケアと支持療法の言葉のイメージ
52号：死亡前6か月間の症状推移
56号：がん性疼痛の心理介入のメタアナリシス
61号：がん診断後1年間の不安・抑うつの推移
68号：ライフレビューのシステマティックレビュー
73号：専門的緩和ケアのQOL改善効果のシステマティックレビュー
79号：早期緩和ケアでのコーピング支援の媒介分析

80号：がん診断後1年間の症状推移
88号：アロマ、マッサージ、リフレクソロジーのシステマティックレビュー
論文を選ぶ際に重視していたのは、研究計画の質、テーマの興味深さ、学術的・臨床的重要性です。ご紹介した研究を「おもしろい」と思って読んでくださった会員の方が少しでも多くいらっしゃれば大変嬉しく思います。拙文にもかかわらず、長らくお読みいただきありがとうございました。

論文を読み、届けるという営み：緩和医療ニューズレター「Journal Club」掲載終了に寄せて

湘南医療大学　薬学部
佐藤　淳也

私は、第71号（2016年5月）から緩和医療ニューズレターに関わることになった。きっかけは、岩手・盛岡での講演に訪れた佐藤一樹先生（当時・東北大学 緩和ケア看護学分野）の一言だった。「薬剤師さんの薬の話も盛り込みたい」とのお誘いに賛同し、以後、継続して寄稿を続けてきた。
以来9年間、事務局からの「今号も執筆いただけますか」という丁寧な依頼に、ただの一度も断ることなく応じ続けた。結果として、第107号（2025年5月）まで、計37本の記事を投稿したことになる。当初薬剤師は私ひとりだったが、その後5人の仲間が加わり、交代しながらも精力的に執筆を重ねてくれた。
この活動は、緩和医療に関わる医療者として、私にとってかけがえのない経験であり、職業人生における誇りでもある。3カ月ごとの寄稿に際しては、Supportive Care in Cancer や Journal of Pain and Symptom Management といった主要誌を丹念にスクリーニングする。そうした習慣は、この活動がなければ身につかなかっただろう。
読者にとって有益な記事とは何か、薬剤師ならではの視点をどう活かすか――個人の興味と会員全体の関心を天秤にかけながら、毎号のテーマを選んできた。
「Journal Club」掲載終了の報せを受け、一つの時代の終わりを実感している。もちろん残念ではあるが、納得もしている。近年の生成AIの進化は著しく、私自身、AIを使わない日はほとんどない。英語論文の検索・選定・読解においても、もはや不可欠な道具である。翻訳精度も高まり、情報へのアクセスは格段に良くなった。そうした中で、「学会から教えてもらう」スタイルは、役割を終えつつあるのかもしれない。
それでも、AIがどれだけ進化しても、それを使う人間が論文を読み、考える営みは変わらない。臨床の疑問や研究のヒントを得るために文献をあたり、理解するプロセスは効率化された。だからこそ、AIにより生まれた時間を現場の実践や対話に活かすことが、これからの緩和医療の質を高める力に変わってゆくと信じている。

Journal Clubへの参加を通して得た学びとその感謝

小牧市民病院　薬局
山本　泰大

私は、2018年2月から緩和医療ニューズレターのJournal Clubに関わる機会をいただいた。初めてこの仕事を引き受けた際には、自身の未熟さから、その役割にふさわしいかどうか不安を抱えながらのスタートだった。しかし、その不安を乗り越え、緩和医療に従事する医療者にとって有益で価値のあるコラムを提供すること、特に薬剤師ならではの視点を取り入れることを目標に取り組んできた。この執筆を通じて、緩和ケアの分野では複雑な医学的課題に対する新たなアプローチや治療法の開発が進んでおり、その最前線に触れ

ることができたことは、私にとって非常に貴重な経験であり、大きな学びとなった。

この Journal Club への参加を通じて、さまざまな専門分野の著名な研究者や臨床の専門家と交流する機会も増え、その過程で得られた貴重な知見や意見交換は、私の学びにとって欠かせない部分であった。医療の最前線で活躍する人々と直接関わることで、視野が広がり、自己成長にもつながった。

Journal Club で論文を紹介するという作業は、単なる文献の翻訳にとどまらず、得られた知見をどのように読者に伝えるかというスキルが求められるものである。そのため、毎回どのようにすれば読者にとって有益で理解しやすい内容にできるかを意識しながら執筆した。この過程を通じて養った思考力や表現力は、今後の臨床活動においても大いに役立つと感じている。

AI 技術の進化により、文献の翻訳や検索が効率的に行えるようになり、これらの技術を活用することで、膨大な量の情報に迅速にアクセスすることができる。しかし、AI が提供する情報をどのように解釈し、それを臨床にどう活かすかという点では、依然として人間の判断力が求められると考えている。AI はあくまで補完的なものであり、人間の判断と経験が重要であるという点を常に意識し、活用していく必要があると考えている。

今後も、緩和医療の分野に貢献できるよう、より深い知識とスキルを身につけ、常に最新の情報に関心を持ちながら学び続けていきたい。

Journal Club を振り返って

北海道がんセンター　薬剤部
深井　雄太

それまで担当していた先輩から引き継いで、私が Journal Club を担当させていただいたのは、2021 年 11 月発行の第 93 号だった。当時の自分は薬剤師になって 9 年目、日々論文を読む習慣もろくに身につかないでいる自分に論文紹介という仕事は分不相応だからお断りするべきかとずいぶん悩んだ。だが、せっかくの機会をいただいたことだし、自分のためにもなるかもしれないなと思い切って引き受けることにしたことを覚えている。

当時から佐藤先生、山本先生はすでに Journal Club を連載しており、お二人から色々と教えていただき、助けていただきながら、第 107 号まで全部で 9 記事、なんとか続けることが出来たかなと思う。わずか 9 記事ではあるが、この記事作成をきっかけに読んだ論文が自分の臨床業務や、後輩や同僚の臨床疑問解決にも役立つことが何度もあった。もしも、自分が作成した記事を読んで、同じように臨床での行き詰まりを解決できた人が世にいてくれたとしたら、こんなに嬉しいことはない。

昨今の AI の進歩もあり、この Journal Club がその役目を終える。それは残念にも思うが、世の中の進歩や流れとして、それもやむを得ないことだろう。実際に自分が論文を探すときにも PubMed をそのまま検索するだけではなく AI も活用しながら探すことが多くなった。

AI は論文の検索・和訳・要約などを非常にスピーディーに行ってくれるため、心強いツールになることは間違いない。ただその一方で、じっくり一つの論文に向き合う時間は減った気もしている。コスパ・タイパと効率が求められる忙しい世の中で、真逆のことと笑われるかもしれないが、この Journal Club の仕事を通じて、ひとつの論文をじっくり何度も読み返すことでしか気付けない視点や考え方があることを私は学ばせていただいたように思う。これからも AI に任せきりにばかりせず、ときにはじっくりと読み込み、気付きを得られる時間もまた、大切にしていきたい。

そして何より、この連載をきっかけにたくさんの御縁をいただいた。いつも読んでます、と声をかけていただいた方がいたり、新しい仕事や学会活動に関わらせていただく機会にも恵まれた。連載は終わりとなってしまうが、また紙面で誰かとつながりながら知識や経験を深めていけるような場が続いていけば嬉しい。短い間でしたが、本当にありがとうございました。

Journal Club を振り返って

山形県立保健医療大学大学院　保健医療研究科
青山　真帆

ニューズレター第 107 号をもって、Journal Club の掲載が終了したとのこと。これまでこの企画に携わってきた一人として、感謝の気持ちを込めて少し振り返ってみたいと思います。

私が Journal Club に初めて寄稿させていただいたのは、第 60 号（2013 年 8 月号）でした。当時は大学院博士後期課程に在籍しており、緩和ケアの研究に足を踏み入れたばかりの頃でした。Journal Club は、大学院生や若手研究者にとっての“登竜門”的な存在であり、緩和ケア領域や自身の関心領域の最新論文、または重要な論文を、自らの力で要約・紹介する貴重な機会を提供してくださっていたと感じています。1000 字程度という制限の中で、コメントも含めて書くことが求められたのですが、単なる抄録の翻訳ではやや足りないところが絶妙なポイントでした。研究デザイン、専門用語、解析手法などを一つひとつ調べながら原稿を仕上げる経験は、今の自分に確実に繋がっていると思います。正直なところ、「果たしてどれくらいの人が Journal Club を読んでいるのだろう…」と思ったことも失礼ながら実はありました。しかし、読み込みが不十分だった回に限って、指導教授から「ここ、ちょっと違うんじゃない？」とチクリと指摘されることもあり、甘く見てはいけないという緊張感があったのも、今では良い思い出です。

その後は自分で執筆するよりも、どちらかといえば、後進に担当を割り振る役割を担うようになりました。所属研究室の大学院生や旧知の若手研究者に声をかけ、この企画をつないできました。この企画の趣旨は、会員の皆さまに有用な論文を紹介し、知見を広げていただくことですが、私自身の経験からも、若手研究者にとっては緊張感をもちつつ学術的な文章を書くトレーニングの場となり、大きな成長のきっかけになったのではないかと思います。昨今、テクノロジーの進化は著しく、論文の要約や翻訳は AI が非常にうまくやってくれます。便利な反面、自分でサマリーを行う力を鍛える機会は減りつつあります。そうした意味でも、Journal Club のような企画は、力を養う貴重な場だったと改めて感じます。

ニューズレター上での Journal Club は一区切りとなりましたが、私自身、そして執筆を担ってきた若手たちにとって、その存在はしっかりと心に残り、未来へとつながる糧になった―少し大げさかもしれませんが、そう思っています。

最後に、本企画の運営に携わってくださった事務局の皆様、委員の皆様、執筆に快諾くださった先生方に、心より御礼申し上げます。長きにわたり、本当にありがとうございました。

Journal Club を振り返って

三重大学大学院　医学系研究科
角甲　純

私が日本緩和医療学会の Journal Club に関わることになったのは、2018 年 9 月にいただいた 1 通のメールがきっかけでした。看護職にとって有益な文献を選び、紹介文を執筆するというもので、看護系論文の担当としての参加が始まりました。

最初に紹介したのは、第 81 号（2018 年 11 月発行）で、自身が筆頭著者を務めた論文でした。少し気恥ずかしさもありましたが、「この研究を伝えたい」という思いとともに、この取り組みがスタートしました。文献紹介は毎号チームで分担しながら執筆し、多様な視点を持ち寄るスタイルで進めてきました。私が担当したのは 6 号で、以下の論文を紹介しました：

・終末期がん患者における呼吸困難に対する送風の有効性についての無作為化比較試験（81 号）
・ICU 入床中患者のせん妄予防に対する、柔軟な家族面会の有効性について－ ICU 面会時間無作為化比較試験―（85 号）

・台湾におけるがん性疼痛のケアパターンと疼痛コントロールに対するGPM（Good Pain Management）病棟プログラムの有効性（89号）
・がん患者のオピオイド誘発性便秘症に対する指圧の有効性：単盲検無作為化比較試験（95号）
・緩和ケア領域における口渇および口腔乾燥に対する新たな支援：無作為化比較試験（101号）
・転移性消化器がん患者の倦怠感に対する深部横隔膜呼吸の効果：無作為化比較試験（107号）

文献選定にあたっては、「看護系の介入研究」という軸を意識していましたが、緩和ケア領域では数が限られていることを実感し、「看護の現場に活かせそうか」という視点を大切にしながら、チームで相談し合って選定してきました。看護系論文チームは協力的で多彩なメンバーに恵まれ、1年に1回程度のペースで担当がまわってくる落ち着いたリズムの中、丁寧に準備を進めることができました。事務局のご支援や体制整備もあり、継続のしやすさがあったことにも感謝しています。

紹介活動は、看護の本質やケアのあり方をあらためて考える機会にもなりました。こうした小さな学びの場が、今後も形を変えて広がっていくことを願っています。本来であれば、役割を次の世代に引き継ぐことで、継続的な活動として繋いでいきたかったという思いもありました。それが叶わなかったことには一抹の寂しさもありますが、これまで培われてきた知の営みや学びの姿勢は、きっとどこかで生き続けていくと信じています。Journal Clubが一区切りを迎えることとなった今、6年以上にわたる貴重な学びと協働の経験に心から感謝しつつ、知の共有と実践への還元の場が、これからもさまざまな形で受け継がれていくことを願っています。

Journal Clubを振り返って

名桜大学大学院　看護学研究科
木村　安貴

私は2019年よりJournal Clubに参加させていただきました。緩和領域における看護師の実践や研究に活かせる知見を共有する立場として関わらせていただき、主に最新のエビデンスに基づく研究を紹介する機会をいただきました。

当初は、看護分野でなおかつ緩和ケア領域で関心があるケアに焦点を当てた場合、非ランダム化比較試験などの実証的な研究が限られており、関心を引く論文を見つけることに難しさを感じていました。「もう次の担当が回ってきた…」と悩んだ時期もありましたが、他のメンバーの選定した論文やその視点に触れるうち、自分自身の視野の狭さに気づかされました。緩和医療は医師や看護師などの多職種で構成される分野であり、「緩和」というキーワードのもと、異なる職種の研究手法や着眼点を知ることで、看護研究にも応用可能な貴重な論文に出会うことができました。また、本取り組みを通じて、看護領域における課題にも改めて目を向けることができました。

私たち看護師は、日々行っているケアの効果をどのように評価するか悩む場面が多くあります。症状緩和に関する評価指標はある程度開発されてきていますが、社会的・スピリチュアルな苦痛の緩和に関しては、現場での試行錯誤が多く、まだエビデンスとして体系化されているとは言いがたい状況です。こうした課題に対しては、まず私たちが日々の実践を丁寧に記述し、共有する姿勢が求められます。その蓄積が、研究のプロトコルや評価指標の開発、さらには看護実践の科学的根拠の構築へとつながると感じています。

Journal Clubに参加したことで、文献を通じて考えを深め合える仲間に出会うことができました。どのような論文にも学びがあり、どれもがエビデンス構築のための大切な一片であることを再認識する機会となりました。お声がけくださった角甲純委員をはじめ、共に活動を支えてくださったメンバーの皆様に、心より感謝申し上げます。

Journal Club を振り返って

兵庫県立大学　看護学部
清原　花

この度は、このような貴重な機会をいただき、誠にありがとうございます。私は 2022 年 2 月発行のニューズレター第 94 号より、Journal Club への執筆の機会をいただき、これまでに 3 度寄稿させていただきました。執筆を通じて、様々な研究に触れることができ、大変有意義な経験となりました。特に、普段の研究では造血器腫瘍や造血幹細胞移植に関する文献を中心に読んでおりますが、Journal Club の執筆を通じて、緩和医療分野の幅広い研究に触れることができたことは、私にとって非常に新鮮であり、大きな刺激となりました。

また、研究者として初期キャリアの段階でこのような執筆経験をさせていただけたことは、論文を読み解く力を養ううえでも非常に意義深いものでした。特に、限られたスペースの中で論文の要点を抽出し、どのように読者の皆様にわかりやすく伝えるかという点は、「伝える力」が問われる貴重な機会であったと感じております。この経験を通じて、批判的視点を持って論文を読む姿勢や、情報を論理的に整理・要約する力、さらに臨床への応用を意識して考察する力など、研究者としての基礎力を高めることができました。

さらに、毎号の Journal Club を拝読する中で、緩和医療分野における新たな知見やエビデンスが次々と紹介されていることに触れ、医療が日々進歩していることを実感いたしました。中でも、先生方が執筆されたコメントは、研究の背景や臨床的意義、実践現場との関連など、多面的な視点から論文を捉えることができ、研究や臨床に対する新たな考え方を得る大きな助けとなっておりました。私自身も、こうした視点をもって論文を読み解くことの重要性を学び、臨床と研究をつなぐ意識をより一層高めることができました。

また、多職種による論文紹介を通じて、チーム医療における看護の役割を再考する機会にもなりました。緩和医療において看護職がどのような支援を提供できるのか、どのような研究的貢献が可能であるのかを改めて考える契機となり、看護学の発展に対する関心もより深まりました。

ニューズレターの発行のたびに、「今回はどのような研究が紹介されているのだろう」と、楽しみに拝見しておりました。Journal Club の掲載終了に際しては寂しさもありますが、これまでに得られた学びを今後の研究活動にしっかりと活かし、より良いケアの実現に向けて尽力してまいりたいと思っております。

Journal Club を振り返って

東邦大学　看護学部　がん看護研究室
小林　成光

2019 年より、日本緩和医療学会の「Journal Club」において看護系の論文紹介を担当し、今回で 6 回目の執筆となった。本稿が最後となるにあたり、これまで取り上げてきた研究を振り返りつつ、感謝の意を込めて以下に述べていく。

これまでに紹介してきた論文はすべて、看護実践に有用であると考えられる研究に焦点を当て選定してきた。第 1 回（第 83 号）では、終末期患者に対する口腔ケアが、口腔内の状態や不快症状の軽減、快適さの向上につながることを示した前向き観察研究を取り上げた。日常的なケアを継続的に提供することの重要性を示す内容であった。第 2 回（第 87 号）では、緩和ケア病棟におけるアロマセラピー・マッサージが睡眠や倦怠感に与える効果を検討したランダム化比較試験を紹介した。統計的な有意差は認めなかったものの、特定の対象に対する効果が示され、個別性に応じた支援の重要性が示された。第 3 回（第 91 号）では、乳がん患者に対する看護師主導のグループ情報提供と個別情報提供の効果を比較した研究を紹介した。両者に統計的な有意差は認めなかったが、人的資源の効率的活用という観点から、グループによる情報提供の可能性が示唆された。第 4 回（第 97 号）では、遠隔診療を用いたがんサバイバーへの看護介入が未充足ニーズの改善に寄与することを示した介入研究を紹介した。ICT を活用した看護支援のあり方を考える上で有意義な示唆を

与える内容であった。第5回（第103号）では、化学療法開始時に音楽を聴くことが不安や悪心の軽減、満足度の向上に寄与することを示したRCTを取り上げた。簡便かつ非薬物的な介入として、音楽療法の実践的意義の可能性を示す研究であった。

これらの論文はいずれも、看護職の視点から、がん患者およびその家族の苦痛を緩和し、QOLの向上に役立つ有用な支援を紹介することを意図して選定したものである。本連載を通じて、筆者自身も論文を丁寧に読み解き、その臨床適用の可能性を考察する貴重な機会を得ることができた。また、最新の取り組みや実践の工夫に触れることで、自らの研究や教育にも多くの刺激と示唆を得ることができた。今後、再びこのような機会が得られれば、新たな視点で取り組んでみたいと考えている。

最後に、本連載の執筆機会を提供してくださった編集委員各位および事務局の皆様に、心より感謝申し上げる。今後のさらなる発展と、関係各位の一層のご活躍を祈念する。

Journal Watch を振り返って

名古屋大学大学院　医学系研究科　総合保健学専攻
川島　有沙

ニューズレター読者の皆様は「Journal Watch」というコーナーをご存じであろうか。日本緩和医療学会のニューズレターで 23 年にわたり続いた、この「Journal Watch」が、2025 年 5 月号をもって終了することとなった。緩和医療の発展とともに歩んできたコーナーの締めくくりとして、本稿では Journal Watch を振り返りたい。

筆者が Journal Watch に出会ったのは 2019 年である。修士課程を終え、臨床現場に復帰した後の日々で、論文に触れる時間が減ることを懸念していた時期であった。ある日、気になった論文のタイトルを和訳して検索したところ、Journal Watch に出会った。なんと、13 もの有名ジャーナルに掲載された論文から、緩和ケア関連の論文のタイトルと書誌情報をピックアップしており、ご丁寧に和文のリストにしてくれているのである。数枚の PDF にさらりと目を通すだけで、世界でいま注目されている緩和ケアのトピックやトレンドが分かるのだ。「これさえ読めば、時代に取り残されずに済む！」と、宝の地図を手に入れたような感覚であった。

これまでの Journal Watch の歴史を振り返ると、2002 年度から 2011 年度までは森田達也先生、2012 年度から 2020 年度は佐藤一樹先生が執筆をご担当され、筆者にバトンが渡されたようだ。筆者が担当した約 4 年間の論文リストを見返すと、COVID-19 への対応をきっかけとしたデジタルヘルス系の論文や、AI 系の論文が急激に増加している。この時代の変化に合わせて、ニューズレターも変わることを決めた。AI 技術の発展により、読者の情報収集手段が多様化した、という理由での Journal Watch の終了である。かつて筆者が Journal Watch に救われたように、これからは AI 技術が論文情報の集約を可能にするものと期待し、次のバトンを渡したい。

最後に、長きに渡り Journal Watch をご担当いただいた森田達也先生と佐藤一樹先生、原稿の査読をしていただいたニューズレター編集委員会の先生方、原稿の校正をしていただいた永田理加様、そして、ニューズレターのお取りまとめをいただいた日本緩和医療学会事務局の皆様に深く感謝を申し上げたい。

よもやま話

多職種が協力し合う土壌のために熊本県で取り組み続けている試み

熊本大学病院緩和ケアセンター　　吉武　淳

「緩和ケア」という言葉が、ようやく定着しつつあるような気もする昨今、それでも現場で働いていると、“全人的ケア”からは程遠いと感じることがありますが、皆様は如何でしょうか。「終末期の専門領域」「がん医療の一部」といったイメージを塗り替えることは簡単ではなく、“苦痛の緩和”や“QOL”という視点が、十分に共有されているとは言い難い――そんなもどかしさを感じることもあります。さて、2024年105巻に引き続き、よもやま話の原稿を書いています。この原稿では“全人的ケア”を念頭に、熊本県で実施されてきた緩和ケアにまつわる様々な活動を徒然に綴ってみたいと思います。

まず、熊本県では2010年にがん診療連携パス「私のカルテ」の運用が開始され、早期の緩和ケアの導入および連携を目的とした緩和ケアパスを作成しました。このパスが基礎となり、「在宅緩和ケア地域連携パス」の作成、試運用を経て「在宅緩和ケアノート」へ、さらには「私のノート」・「私の日記」・「私のメッセージ」という3点セットの県下共通コミュニケーションツールとして発展してきました。このような変遷と歴史がある連携ツールが昨年見直され、3点セットが集約された新たな改訂版「私の日記」が誕生し、2025年度から運用を開始しています。今回リニューアルした「私の日記」は、大切にしたいこと、好きなこと、どんなふうに過ごしたいか等を書いてもらう「プロフィールや大切にしたいこと」編と、日々の体調や生活について記録する「体調の記録」編が収まった一組の冊子で、あらゆる疾患を対象に誰もが使用できるものになっています。

次に、2025年度で8回目を迎える「熊本県栄養士のための緩和ケア研修会」は、2015年の熊本緩和ケアカンファレンスに参加した管理栄養士から、管理栄養士にこそ出来る緩和ケアの勉強をしたいという意見が多かったことをふまえて開催となったものです。参加する管理栄養士の勤務先は病院・行政・老健施設・薬局など多岐にわたり、研修内容は患者の食支援に必要な知識を得るために、毎回のテーマにそって、美味しい料理はもとよりACPやコミュニケーションスキルなどを学び、グループワークで意見交換を行っています。研修会に参加する管理栄養士が自身の存在価値を確認する貴重な機会となっていることを願いつつ、“食べることは生きること”を共有する仲間たちが集う機会です。

そして、2022年から実施されている「くまもと緩和ケアWebラウンジ」の紹介です。県内各地域や医療機関で緩和ケアに従事する医療者が抱えるお悩みや経験談について、気軽に相談・情報共有することを目的として、2ヶ月に1回、平日の時間外に無料のWebラウンジを開催しています。2025年3月の開催テーマは“緩和ケア従事者どうしの顔の見える関係づくりについて”でした。オンラインで行い、“まるでお茶を飲みながら”のような気軽さをコンセプトにしています。

最後に、「熊本県地域緩和ケア連携調整委員会」について紹介します。国立がん研究センター主催の「地域緩和ケア連携調整員研修」を修了した県内7施設の多職種で構成された委員が集い、2023年から緩和ケアの連携に関する課題や活動計画について定期的に共有しています。2025年度は「多施設」をキーワードに活動報告を行う予定です。そこで熊本大学病院緩和ケアセンターでは、当院が関わり看取りとなった方々を対象とした多機関多職種参加型の“グリーフカンファレンス”を実践しています。地域連携が叫ばれる昨今ですが、自分や自分の施設が関わった方がどこでどうなったのか、あるいはどこでどうしてこられたのか、医療・看護関係者はお互いに知らないことが多々あります。診療情報提供書や退院前カンファレンスでは伝えられないことも少なくありません。この“グリーフカンファレンス”が、人としての繋がりを重視した医療者同士の結びつきの機会になればと願いながら続けていきたいと思います。

以上、熊本県で行われているユニークであろう活動を徒然に書いてみました。もう少し詳細な情報が必要な方は当緩和ケアセンターのHP（https://www2.kuh.kumamoto-u.ac.jp/palliativecare/）をご覧になり、メール等でご連絡ください。

シルクロードとナイチンゲール

国立病院機構　仙台医療センター　　細矢　美紀

今年３月にトルコ共和国イスタンブールを旅した。イスタンブールはボスポラス海峡をはさんでヨーロッパ大陸とアジア大陸にまたがり、ヨーロッパとアジアの異なる文化、そしてキリスト教とイスラム教が混在してきた都市である。古くから東西交易路の要衝として繁栄し、シルクロードの終着点の１つとされる。小学生のときNHKスペシャル「シルクロード」に感激し、玄奘三蔵やマルコポーロが旅をしたシルクロードにいつか行きたいと思ってきた。ローマ、西安（昔の長安）を叶え、毎年シルクロードの都市巡りをする予定だったがコロナ禍で中断。約６年ぶりの再開だった。イスタンブール　ヨーロッパ側の旧市街と新市街を隔てる金角湾にかかるガラタ橋を渡り、カラキョイの桟橋から連絡船でボスポラス海峡を渡り、アジア側のユスキュダールの桟橋についた。偶然、ユスキュダールの昔の地名は「スクタリ」と知った。スクタリはフローレンス・ナイチンゲールが、ロシア帝国とオスマン帝国の間で勃発したクリミア戦争の戦場から黒海を船で移送されてくる傷病兵を収容する兵舎病院において、人生で３年弱という短い看護実践をした土地だ。1854年11月にナイチンゲールがシスターと看護婦38名を率いてスクタリに到着したとき兵舎病院は極めて不衛生な状態であり、必要な物資も届いておらず、ナイチンゲールたちは軍幹部に歓迎もされていなかった。ナイチンゲールたちは兵舎病院中の掃除をして病院組織に入り込み、ナイチンゲールは看護の総責任者として活躍。ナイチンゲールは兵士を一人の人間として尊重し、彼らが持つ力を発揮できるよう福利厚生面の充実にも力を入れる一方、死にゆく兵士をひとりにさせないようランプを手にして夜の巡視をしたのだった。ユスキュダールには当時の兵舎病院であったセリミエ兵舎が残っており、一画がナイチンゲール博物館となっていた。ナイチンゲール博物館には残念ながら行けなかったのだが、ユスキュダールの桟橋からボスポラス海峡の反対側を眺めると夕日に染まるスルタンアフメト・モスク（ブルーモスク）とアヤソフィアの尖塔、ガラタ塔が見える。ナイチンゲールも172年前に見たであろう景色を眺め、旅の偶然に驚く。看護を学ぶ学生となったときに買った「看護覚え書」を読み返してみた。訳者まえがきに「地球全体にわたって生命の危機がしのびよっているといわれる今日、ひとりでも多くの人がこの著を通して看護を実践する拠りどころをつかみとり、ナイチンゲールが熱望してやまなかった、人間をそして健康を、より高めていく歩みを力強く前進させていく実践家として成長されるよう、私たちは期待している」とある。50年後の現在、パンデミック、温暖化、世界各地の紛争など、人類を取り巻く環境はさらに厳しいものとなっている。看護の初心を忘れずに日々精進していきたいと改めて思う。そしてシルクロード都市巡りの次の計画も進行中だ。

参考文献・引用文献

１）金井一薫；ナイチンゲール，ちくまプリマー新書，2023.
２）フローレンス・ナイチンゲール；薄井坦子他訳，看護覚え書，現代社，1987.

旅は死の“選択肢”になりうるか？
―医療と観光、まちづくりのあいだに生まれるもの

名古屋外国語大学　准教授　　城月　雅大

「旅と医療」。このふたつの言葉が終末期ケアの文脈で交わる機会は、まだそう多くありません。けれど、私はある日、確かにそれを感じる瞬間に立ち会いました。

三重県の藤田医科大学七栗記念病院。終末期を迎えた一人の患者さんと、病院の外をほんの10分、車椅子でまわったときのことです。冷たい風が吹く寒い日。その中で、患者さんがふと口にしたのが――

「風が、気持ちええなあ。」

その言葉に、私ははっとしました。私にはただ“寒い”としか思えなかった風が、その方には“生きている”ことを感じさせる風だったのです。

旅とは、遠くに行くことではありません。感じること、思い出すこと、そして意味を見出すこと。「もう一度、〇〇に行きたい」という願いの奥には、その人の人生で大切にしてきた記憶や関係性が必ずあります。医療や福祉がその願いにどう寄り添えるのか――それが、私の研究のテーマであり、実践していきたい問いでもあります。

現在は、「死を意識したとき、人はどんな旅を“本物”と感じるのか？」というテーマのもと、旅行体験と死生観の交差点を探る研究に取り組んでいます。海外では「ツーリズム・フォー・オール」や「観光福祉」といった概念が少しずつ広がりを見せていますが、日本ではまだ萌芽段階です。

しかし、もしあのときのように「風が気持ちいい」と感じられる“旅”が、終末期の選択肢のひとつとして用意されていたら？身体的に移動が難しい方には、VRを通じた「記憶の旅」や「想像の旅」という可能性もあります。目的地ではなく、感情や体験を届ける――そんな旅が“生きること”を支える支援になり得ると、私は信じています。

人生の終盤における旅は、レジャーではなく、意味をつくる行為です。あの日の風のように、何気ない一瞬が「まだ私は生きている」という実感になる。そんな旅の価値が、制度として、社会のしくみとして支えられる未来を、私は思い描いています。

もちろん、観光業が果たす役割も小さくはありません。現実には、終末期の方はもちろん、高齢者や障がいを持つ人にとっても、旅は「選べる体験」にはなっていないのが現状です。制度の壁、移動の困難、そして「旅＝若く健康な人のもの」という既成概念が、それを阻んでいます。

「死を過度に商品化しないこと」――この点において、倫理的な慎重さは不可欠です。しかし同時に、旅がもたらす人間的な価値に目を向ける視点も、今の社会には求められているのではないでしょうか。

私は観光学を出発点に、医療や福祉の現場と協働しながら、「まちづくり」の視点も重ねて研究を続けています。地域の交通、観光、商店、医療機関がゆるやかにつながり、高齢者や終末期の方が「また行きたい」と思える場所を、社会全体で支えていく。そんな未来を、遠い理想ではなく、目の前の“風の手触り”から考えはじめたいのです。

七栗記念病院の皆さま――病院長、看護部長、看護長、そして日々患者さんに寄り添うすべての医療スタッフの方々に、深い感謝を申し上げます。皆さまの現場での言葉とまなざしが、私の研究を方向づけています。

また、こうした異分野の視点を受け入れ、“医療を社会につなぐ”研究体制を持っている藤田医科大学の柔軟さにも、心から敬意を表します。病院が果たす役割の大きさ――それは、医療と地域、そして人と人をつなぐ力に他なりません。

「風が気持ちええなあ」――その一言の奥に、人が人らしく最期まで生きようとする静かな意志があります。その想いに応えられる社会を、医療と観光、そして地域の力で少しずつ形にしていけたらと願っています。

1.Palliative Care Research 編集委員会

Palliative Care Research 編集委員会
委員長　佐藤　一樹

2024 年の査読功労者につきましては、委員の協議と厳正なる審査の結果、以下 9 名を受賞者と決定しました。

1 位　田上 恵太先生
悠翔会 くらしケアクリニック練馬
入賞　市原 香織先生
淀川キリスト教病院
入賞　大日方 裕紀先生
北海道大学大学院保健科学研究院
入賞　小杉 和博先生
筑波大学附属病院
入賞　清水 恵先生
東北大学大学院医学系研究科
入賞　清水 陽一先生
国立看護大学校
入賞　中野 貴美子先生
三重大学医学部附属病院
入賞　西 智弘先生
川崎市立井田病院
入賞　橋口 さおり先生
聖マリアンナ医科大学

2025 年度の日本緩和医療学会総会において、査読功労賞の授賞式を行いました。

2. 第 7 回中国・四国支部学術大会開催に向けて

第 7 回中国・四国支部学術大会
大会長　片山　和久

この度 2025 年 9 月 6 日 (土) に徳島県徳島市の徳島大学蔵本キャンパスで第 7 回日本緩和医療学会中国・四国支部学術大会を開催させていただきます、小松島天満クリニックの片山和久です。開催にあたり招致のご挨拶を申し上げます。

令和 5 年人口動態統計によれば、わが国の年間の死亡数は約 158 万人で前年の約 157 万人より 7,000 人ほど増加し、調査開始以来最多となっています。死因別の第 1 位は、悪性新生物 (いわゆる癌) で死亡数は約 38 万人、第 2 位は心疾患、第 3 位は老衰となっています。これまで議論されてきたように、2025 年は将に「多死社会」に突入したと言えます。このような多死社会にあってわれわれ医療・介護従事者は、その人の人生にどのように関わるかが問われています。そこで本支部学術大会のテーマを「End of Life を多種職で支える」としました。人生に一度きりの“その時”に寄り添いそれぞれの想いを支え橋渡ししていく。医療・介護従事者の「多死社会」おける在り方を皆様と共に学びを深め、考える場としたいと考えております。

特別講演や教育講演は、End of Life を取り巻く課題に基づく企画としました。またシンポジウム 1 は、死因の第 2 位を占める心不全をテーマに「心不全の緩和ケア」として、シンポジウム 2 は、医療と介護を結ぶケアマネジャーさんにご依頼し、シンポジウムを企画していただきました。

【特別講演】東京大学　会田薫子先生「共同意思決定と ACP ― 意思決定支援とは」

【教育講演 1】いなば法律事務所　稲葉一人先生「直面する臨床倫理的課題」

【教育講演 2】くらしケアクリニック練馬　田上恵太先生「踏み出す＆受け入れる、一歩の勇気が専門医療アウトリーチを結実させる！」

【シンポジウム 1】「心不全の緩和ケア」は、基幹病院、クリニック、市中病院それぞれのお立場から現状分析や直面する課題をご講演いただきます。最後に訪問診療医としてご活躍されている真星病院大石醒悟先生にご講演をいただき皆様と議論を深めたいと思います。

【シンポジウム 2】「緩和ケアのチームアプローチにおけるケアマネジャーの役割」は、これまで医療や介護の調整役を担ってこられたケアマネジャーにスポットを当ててご講演をお願いしています。

【市民公開講座】京都大学　佐藤泰子先生「妖怪人間ベムは永遠に笑わない _ 生きる意味は間 (あわい) に」として、End of Life に考える「生きる意味」のご講演をお願いしております。

日本緩和医療学会の中国・四国会員の皆様には、一般演題と示説にてそれぞれの地域での研究や事例、活動をご報告していただきます。

「End of Life」に関わる医療・介護従事者の皆様に多数ご参加いただき、有意義な学びを深められる場をと願い、準備委員会で鋭意準備を進めております。多方面から多種職の皆様にご参加をいただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

3. 第７回関東・甲信越支部学術大会開催案内

第７回関東・甲信越支部学術大会
大会長　坂下　美彦

第７回関東甲信越支部学術大会を10月18日（土）に幕張メッセ国際会議場におきまして開催することになりました。本大会テーマは「これからの緩和医療―変わることと変わらないこと―」としております。2025年となり緩和医療を取り巻く状況は大きく変化しています。本大会では新しいことに焦点をあてつつも、時代が変わっても変わらない緩和医療の本質のようなものにも光をあてていただけたらと考えております。

今回は千葉の開催ですが、オール関東甲信越で盛り上げたいと考えました。そのため実行委員も千葉に限らず東京、神奈川、茨城、群馬の代議員の方々にもご協力していただいております。

大会を盛り上げるためには充実した企画が重要ですので、今回は支部代議員の方々に企画の募集をさせていただきました。それを基に「多職種が参加し易いこと」「初学者が学べること」「若手の先生方のご登壇」などの観点から実行委員で企画を検討させていただきました。その結果、指定プログラムは多職種を対象としたシンポジウム４題、教育講演４題、失敗事例の検討会、TIPS18項目と大変充実した内容となっております。

是非、多くの方々のご参加をお待ちしております。

＜指定プログラム＞
シンポジウム
1.「チーム医療の光と影」
2.「自壊創をあきらめない」
3.「地域とつなごう、多職種で挑むせん妄ケア」
4.「2025年、千葉の緩和ケアのこれからを語る」
事例検討「失敗事例あるある」×４事例
教育講演
Ⅰ　便秘治療の最新エビデンス
Ⅱ　症状マネジメントの最新エビデンス
Ⅲ　緩和ケアに必要なirAEの知識
Ⅳ　特定行為研修修了者の役割
TIPS（緩和ケアの基本が学べるミニレクチャー）×18項目

4. 東北支部学術大会のご案内

第６回東北支部学術大会
大会長　井上　彰

このたび、第６回日本緩和医療学会東北支部学術大会ならびに第28回東北緩和医療研究会を宮城県仙台市で開催させていただくことになりました。大会テーマは「想いをつなげる」です。

皆さまは日頃、患者さん、ご家族のさまざまな想いを汲み取って日常のケアにつなげておられると思いますが、それらの医療は皆さまを指導し、支えてくださった先達の熱い想いがつながった形であるともいえます。

東北支部の会員様には既にお伝えしていることですが、本大会をもって長年にわたり東北地区の緩和医療の発展に寄与してきた東北緩和医療研究会が最後となります。同会の諸先輩方のこれまでのご尽力に改めて感謝申し上げるとともに、緩和医療学会の会員および若手の皆さまが「想いをつないで」、東北地区の緩和医療をさらに充実させていかれることを願ったプログラム構成とさせていただきました。至らぬ点も多いかとは思いますが、どうぞよろしくお願いします。対面のみの開催ですので、東北圏内に限らず多くの会員様にご参集いただけますと幸いです。

晩秋の仙台は、近郊には温泉で有名な秋保や作並、少し足を延ばせば温泉とともに紅葉も見事な鳴子や蔵王などの観光地もあり、日頃の疲れを癒すにも絶好の機会かと思います。皆さまと仙台でお会いできるのを楽しみにしています。

編集後記

夏まっさかりの日々ですが、読者の皆様はいかがお過ごしでしょうか。この夏、私の住む北海道北見市は、記録的な猛暑となり、本日（令和7年7月24日）北海道の観測史上2番目に暑い39度となりました。一方、冬は氷点下20度になることもあり、この地に住むことの厳しさを実感します。クーラーの無いご自宅もあり、緩和ケアで在宅療養をされている患者さんが心配です。

ニューズレターで長らく掲載を続けて参りました「Journal Club」と「Journal Watch」を終了させていただくこととなりました。不勉強の私は、両記事を頼りにし、ふ～んとかへ～とか独り言とともに読み、興味がわくと論文まで手を伸ばしていました。残念ではありますが時代の流れ、AIの役割拡大に伴うものと自分を納得させています。でも、あらAIって？というレベルの私には寂しい限りです。（部川　玲子）

小早川　誠
坂本岳志
武村尊生
○橋口さおり
部川玲子
細矢美紀
山口重樹
山田圭輔
吉武　淳